

ベトナムにおける「詠二十四孝詩」と中越文化交渉

佐藤 トウイウエン

“Poem about the Twenty-four Filial Exemplars” in Vietnam and China – Vietnam Cultural Interaction

SATO Thuy Uyen

Ly Van Phuc, Tran Tu Dinh, Do Tuan Dai were Vietnamese officials in the Nguyen Dynasty. When they has left for Guang Dong as a government envoy, they were chanting along with the Chinese friends through literature such as Tan Jing Hu (譚鏡湖), Liang Yi An (梁毅菴) about “*The Twenty-four Filial Exemplars*” (「二十四孝」) and “*Poem about the Twenty-four Filial Exemplars*” (「詠二十四孝詩」) was born in such a background. This literature is a collection of poems, which was written by Chinese poem of four lines, each of seven characters (七言絶句) with the content of “the Twenty-four Filial Exemplars”.

Throughout the literature, we can deeply see that Chinese and Vietnamese intellectuals were richly talented persons and their refined spare-time activities at the time. Although this literature was not widely circulated to common people but it had the influence on Vietnamese officials and intellectual class. Besides, there are no doubt about the acceptance and transformation of Chinese culture in Vietnam.

This literature is not only played an important role in circulation “the Twenty-four Filial Exemplars” to the intellectual class, but also useful for researching the Chinese poetry of two countries in terms of linguistics and philology.

キーワード：詠二十四孝詩、ベトナム、李文馥、陳秀穎、杜俊大、譚鏡湖、
梁釗、漢詩

はじめに

「詠二十四孝詩」は、李文馥（リー・ヴァン・フック、Lý Văn Phức）、陳秀穎（チャン・トウ・ジン、Trần Tú Dĩnh）、杜俊大（ドー・トゥアン・ダイ、Đỗ Tuấn Đại）が中国広東に使臣として派遣されたとき、譚鏡湖、梁釗ら中国人の友人とともに唱和した七言絶句の詠詩である。テキストにより、「詠二十四孝詩」、「二十四孝詠」などと題名が異なっているが内容はほぼ同文である。ベトナムにおける「二十四孝」関連文献のうち「詠二十四孝詩」のみは、ベトナム人の知識人と中国人の知識人との唱和詩であるため、両国の文化交渉をよく反映した文献であるといえよう。漢文で書かれたこの「詠二十四孝詩」は、押韻・平仄律をもつ詩歌形式である「双七六八体」の字喃詩に演音された作品「二十四孝演歌」と比較

すると民衆性に欠けるが、当時の官僚や知識人に一定の影響を与えたと推測できる。

本章では、『掇拾雜記』(AB132)所収の「詠二十四孝詩」をとり上げ、それが知識人層にどのような影響を与えたのか、中国とベトナムの文化交渉にどのように貢献したのかを考えてみたい。

一. 作者の履歴

1. 李文馥の履歴

李文馥の経歴について書かれた資料は多く、筆者の調査によれば、少なくとも18点がある。

『漢喃書目－作者目録』(*Thư mục Hán Nôm-mục lục tác giả*)¹⁾には李文馥の氏名、著作などの簡単な事項のみが記されている。『ベトナム文学史要』(*Việt Nam văn học sử yếu*)²⁾、『二十四孝』(*Nhị thập tứ hiếu*、Tân Việt 出版社、1952年)³⁾、『二十四孝』(*Nhị thập tứ hiếu*、Văn Nghệ 出版社、1996年)⁴⁾、『ベトナム作家たちの略伝』(*Lược truyện các tác gia Việt Nam*)⁵⁾、『タンロンの人々の忠孝・節義の鑑』(*Giương trung hiếu tiết nghĩa của người Thăng Long*)⁶⁾、『昔と今の孝行』(*Hiếu hạnh xưa và nay*)⁷⁾には、李文馥の氏名、彼のいくつかの作品などを紹介しているものの、情報は少ない。

李文馥の「自述記」(『掇拾雜記』所収)には、

於埃至南固馱坦北、泃詩禮本明朝執吏、盜兵戈皮黎末竈生。……場乙卯幸預旣鄉薦、行常棣妥連巴
莖、功生成它漢啣媿吒、辭庚辰哪應詔下徵。……辱台欺塗躄裕桁楊、身重卿甘聘几另糴、強朱戈紹
齣神椽併屯巴翠腦醜嗜。……湟霽齋 糊燦茹獄室。⁸⁾

(ベトナムには中国人がいる。祖先は明朝時代、ベトナムに避難してきた。私は黎(レー)朝の末に生まれた。……乙卯科⁹⁾で三人兄弟は郷試に合格した。親の生成の恩に報うことができ、親は喜んだ。庚辰年に、帝の詔旨を受け、任用された。……罪を犯して刑務所に入った。大臣の身分はあったが、老いた兵士と同様、刑務所の淡薄な食事を食べて頑張った。三、四ヶ月なのに非常に長く感じた。……その時、釈放を命じた帝の詔旨を受け取り、刑務所が明るく照らされるように感じた。)

1) Ban Hán Nôm thư viện khoa học xã hội、『漢喃書目－作者目録』(*Thư mục Hán Nôm—mục lục tác giả*)、Ủy ban khoa học xã hội Việt Nam、謄写印刷、1977年、146～147頁。

2) Dương Quảng Hàm、『ベトナム文学史要』(*Việt Nam văn học sử yếu*)、Trung tâm học liệu 出版社、第10版、1968年、392～393頁。

3) Chu lang Cao Huy Giu 注解、『二十四孝』(*Nhị thập tứ hiếu*)、Tân Việt 出版社、1952年、9～10頁。

4) Nguyễn Quốc Thủ 他、『二十四孝』(*Nhị thập tứ hiếu*)、Văn nghệ 出版社、Hà Chí Minh 市 1996年、5頁。

5) Trần Văn Giáp、『ベトナム作家たちの略伝』(*Lược truyện các tác gia Việt Nam*)、Văn học 出版社、2000年、393頁。

6) Nguyễn Trường、『タンロンの人々の忠孝・節義の鑑』(*Giương trung hiếu tiết nghĩa của người Thăng Long*)、Văn hóa Thông tin 出版社、2010年、164～165頁。

7) Cao Văn Cang、『昔と今の孝行』(*Hiếu hạnh xưa và nay*)、Văn hóa dân tộc 出版社、2006年、36～37頁。

8) 漢喃研究院蔵「自述記」(『掇拾雜記』所収、AB132)、写本、第25葉表～第26葉裏。

9) 『大南正編列伝』によれば李文馥は嘉隆18年に郷試に合格した。嘉隆18年は「乙卯年」ではなく「己卯年」である。すなわち、「自述記」に記されている「乙卯科」は誤りである。

とある。

また『大南寔録』には、李文馥について次のように見える。

明命6年 「授李文馥爲禮部僉事協理廣義鎮務」¹⁰⁾。

明命7年3月 「以原清葩參協鄧文添署該簿辦理兵部廣平該簿阮德會辦理戸部廣南記録陳千載爲廣平該簿僉事協理廣南營務陳登儀署廣南記録僉事協理廣義營務李文馥協理廣南營務」¹¹⁾、同年9月 「以僉事協理廣南李文馥署戸部右侍郎吏部僉事黎玳協理廣南營務」¹²⁾。

明命8年 「授梁進祥爲戸部尚書……李文馥爲戸部右侍郎……」¹³⁾、同年10月 「命官纂修百司職制以協辦大學士阮有愼充總裁侍郎申文惟、阮公著、黎文德、李文馥充纂修選部、院屬司充編修、十二人考校校刊四人、謄録十五人令于史館開局爲之初」¹⁴⁾。

明命9年3月 「以兵部左侍郎黎文德署兵部左參知、戸部右侍郎李文馥署戸部右參知……」¹⁵⁾、同年7月 「署戸部右參知李文馥充嘉定場主考……」¹⁶⁾、同年9月 「以署禮部尚書阮科豪署兵部尚書……署戸部右參知李文馥署左參知……」¹⁷⁾。

明命10年 「署戸部左參知李文馥有罪下獄。……畱馥尋派往洋程効力」¹⁸⁾。

明命12年 「清監生陳榮知縣革職李振青及男婦四十餘人搭從商船遭風泊于平定翠磯洋分。……命衛尉黎順靖帶同革員効力李文馥等乘瑞龍大船送之歸」¹⁹⁾。

明命13年 「起復革員李文馥爲内務府正九品書史。……遣署中水副衛尉段恪、署内務府郎中阮知方、司務李文馥等乘定洋船往呂宋公務……」²⁰⁾。

明命15年春正月 「遣該隊阮良輝主事李文馥等管乘定洋清洋諸號船如下州公務……」²¹⁾。同年夏4月 「清廣東捕弁陳子龍師船遭風投泊清葩瀾碧汛命省臣給以錢米尋遣兵部員外郎李文馥、翰林承旨黎伯秀等乘平字號船護送之還」²²⁾。

明命16年夏4月 「遣工部員外郎李文馥署戸部員外郎黎文豪等管將兵船送獲犯于廣東起復革員阮公僚杜俊大爲戸部正八品書吏隸隨公務」²³⁾。

10) 阮朝国史館『大南寔録』正編第二紀卷三十五「大南寔録六」（慶應義塾大学言語文化研究所、1972年）、32頁。

11) 注10前掲、『大南寔録』正編第二紀卷三十八「大南寔録六」、67頁。

12) 注10前掲、『大南寔録』正編第二紀卷四十一「大南寔録六」、115頁。

13) 注10前掲、『大南寔録』正編第二紀卷四十三「大南寔録六」、146頁。

14) 注10前掲、『大南寔録』正編第二紀卷四十八「大南寔録六」、230頁。

15) 注10前掲、『大南寔録』正編第二紀卷五十一「大南寔録六」、282頁。

16) 注10前掲、『大南寔録』正編第二紀卷五十三「大南寔録六」、300頁。

17) 注10前掲、『大南寔録』正編第二紀卷五十四「大南寔録六」、324頁。

18) 阮朝国史館『大南寔録』正編第二紀卷六十二「大南寔録七」（慶應義塾大学言語文化研究所、1973年）、22頁。

19) 注18前掲、『大南寔録』正編第二紀卷七十一「大南寔録七」、168頁。

20) 注18前掲、『大南寔録』正編第二紀卷七十九「大南寔録七」、286頁、297頁。

21) 阮朝国史館『大南寔録』正編第二紀卷一百十八「大南寔録九」（慶應義塾大学言語文化研究所、1974年）、40頁。

22) 注21前掲、阮朝国史館『大南寔録』正編第二紀卷一百二十四「大南寔録九」、144頁。

23) 阮朝国史館『大南寔録』正編第二紀卷一百五十「大南寔録十」、（慶應義塾大学言語文化研究所、1975年）、118頁。

- 明命17年3月 「如東派員工部員外郎李文馥等還言船過虎門海嶼兩遇颶風船中水尺許帆索盡裂勢甚危急弁兵悉力撐護幸得無事。帝嘉之賞馥等加一級弁兵準陞授拔補賞給錢文有差」²⁴⁾。
- 同年6月 「河寧總督鄧文添奏言探問清商稱有官船流泊于崖州。……遣工部員外郎李文馥主事黎光瓊等管率水師竝銀槍神機礮手乘平洋船遍往探訪之」²⁵⁾。
- 明命18年春2月 「授李文馥爲工部郎中權辦部務」²⁶⁾。
- 同年秋7月 「以禮部郎中潘輝湜爲禮部左侍郎……工部郎中辦理部務李文馥陞署工部右侍郎……」²⁷⁾。
- 明命21年 「以工部右侍郎李文馥權理京畿水師事務……」²⁸⁾。
- 紹治元年 「遣使如清告哀以署工部右參知李文馥爲禮部右參知充正使、署乂安布政阮德活爲禮部右侍郎充甲副使、辦理兵部裴輔豐爲光祿寺卿充乙副使冠服賞給加一等特格也……」²⁹⁾。
- 紹治2年 「如清使部禮部右參知李文馥……還自燕入覲復命宣召陸殿慰問久之改補馥爲禮部左參知……」³⁰⁾。
- 紹治3年 「命署刑部左參知范惟貞充承天場主考、……禮部左參知李文馥充乂安場主考興化按察范輝副之……」³¹⁾。
- 紹治6年 「帝曰今應制詞臣十八人恰與唐登瀛洲之數相符〔大學士張登桂、鄧文添、尚書林維浹、左副都御史潘清簡、參知阮德活、陶致富、李文馥、裴楨、阮文典、范世顯、黃濟美、侍郎阮澤、范瑣、張國用、內閣阮德政、武范啓、阮久長、黎眞凡十八人〕復喜賦一章有賛治臣鄰森會上能詩子弟半筵中之句各賜之文房四寶」³²⁾。
- 同年夏6月、「命禮部左參知李文馥充分纂」³³⁾。
- 紹治7年2月 「帝怒其有虧國體命錦衣枷禁于左待漏解職下廷議。……降郎中李文馥、阮廷賓俱革職發耆武爲兵……」、同年7月、「起復革員李文馥、阮廷賓、翰林侍讀黎眞翰林院承旨阮咸寧翰林院著作均充修書所編輯……」³⁴⁾。
- 嗣德元年 「命參知張國用郎中辦理禮部事務李文馥、掌衛阮俊充監辦〔整理陳設隆安殿〕掌衛張進往來附辦」³⁵⁾。

24) 注23前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百六七「大南寔録十」、352頁。

25) 注23前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百七十「大南寔録十」、411頁。

26) 阮朝国史館『大南寔録』正編第二紀卷一百七十八「大南寔録十一」、(慶應義塾大学言語文化研究所、1975年)、123頁。

27) 注26前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百八十三「大南寔録十一」、208頁。

28) 阮朝国史館『大南寔録』正編第二紀卷二百十四「大南寔録十二」(慶應義塾大学言語文化研究所、1976年)、280頁。

29) 阮朝国史館『大南寔録』正編第三紀卷二「大南寔録十三」(慶應義塾大学言語文化研究所、1977年)、35頁。

30) 注29前掲、『大南寔録』正編第三紀卷十七「大南寔録十三」、252頁。

31) 注29前掲、『大南寔録』正編第三紀卷三十二「大南寔録十三」、433頁。

32) 阮朝国史館『大南寔録』正編第三紀卷五十四「大南寔録十四」(慶應義塾大学言語文化研究所、1977年)、240頁。

〔 〕内は双行注。

33) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷五十九「大南寔録十四」、293頁。

34) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷六十五、卷六十六、卷七十「大南寔録十四」、371頁、378頁、435頁。

35) 阮朝国史館『大南寔録』正編第四紀卷二「大南寔録十五」(慶應義塾大学言語文化研究所、1979年)、59頁。〔 〕内

ただし、『大南寔録』には当然ながら李文馥の幼少期の情報は記載せず、官吏になって以降のことを記している。

『大南正編列伝』二集には、

李文馥、字鄰芝、河内永順人、嘉隆十八年領鄉薦、明命初授翰林編修充史館、累遷禮部僉事、協理廣義鎮務、兼管六堅奇、轉直隸廣南營參協、辦事多中窾、上嘉之、入爲戸部右侍郎、署右參知。坐事削職、從派員之小西洋効力又之新嘉波、尋開、復内務府司務、管定洋船如呂宋、廣東公幹、又擢兵部主事、復如新嘉波、又累如廣東、澳門公幹。歷遷工部郎中除工部右侍郎兼奮鵬船如新嘉波、公回、署工部右參知、權理京畿水師事務。紹治元年、特授禮部右參知、充如燕正使、既而以外舶來沱汎、辦事不善案擬發兵、尋開、復侍讀。嗣德元年、遷郎中辦理禮部事務。明年、擢光祿寺卿。尋卒、追授禮部右侍郎、所著有西行見聞録、閩行詩草、粵行詩草、粵行續吟、鏡海續吟、周原襍咏等集文、馥有文名爲官屢躋復起前後、閱三十年多在洋程校勞風濤驚恐雲煙變幻所歷非一輒見於詩云子文苾以廕補授建瑞知府」³⁶⁾。

とある。しかし、ここには昇格や降格といった年次は詳細に記されていない。

その他、『李文馥、19世紀の作者』（*Lý Văn Phức, tác gia thế kỷ 19*）³⁷⁾、『文学事典』新版（*Từ điển văn học bộ mới*）³⁸⁾、『ハノイの著名人』（*Danh nhân Hà Nội*）³⁹⁾、『ベトナム漢喃の作家の字、号』（*Tên tự tên hiệu các tác gia Hán Nôm Việt Nam*）⁴⁰⁾、『李文馥、経歴一作品』（*Lý Văn Phức Tiểu sử-Văn chương*）⁴¹⁾、『西廂伝』（*Truyện Tây Vương*）⁴²⁾、「周遊列国的越南名儒李文馥及其華夷之辨」⁴³⁾、「ベトナム歴史の著名人」第1冊（*Danh nhân lịch sử Việt Nam—Tập 1*）⁴⁴⁾に、李文馥の経歴や作品、使節として隣国に派遣された回数などが記されている。

これらの資料をまとめると、李文馥の経歴、作品などは次のようになる。

李文馥は字は隣芝（ラン・チー、Lân Chi）、克齋（カック・チャイ、Khắc Trai）または蘇川（ト・ス

は双行注。

36) 阮朝国史館『大南正編列傳』二集、卷二十五「大南寔録二十」（慶応義塾大学言語文化研究所、1981年）、274頁。

37) Hoa Bằng、『李文馥、19世紀の作者』（*Lý Văn Phức, tác gia thế kỷ 19*）、Thăng Long 出版社、1953年、7～57頁。

38) Đỗ Đức Hiểu 他、『文学事典』新版（*Từ điển văn học bộ mới*）、Thế Giới 出版社、2004年、926～928頁。

39) Vũ Khiêu、『ハノイの著名人』（*Danh nhân Hà Nội*）、Hà Nội 出版社、2004年、531～541頁。

40) Trịnh Khắc Mạnh、『ベトナム漢喃の作家の字、号』（*Tên tự tên hiệu các tác gia Hán Nôm Việt Nam*）、Khoa học xã hội 出版社、2002年、195～197頁。

41) Dương Quảng Hàm 注解、『李文馥、経歴一作品』（*Lý Văn Phức Tiểu sử-Văn chương*）、Nam Sơn 出版社、19??年、9～12頁。

42) Vũ Ngọc Phan 他、『西廂伝』（*Truyện Tây Vương*）、Văn hóa 出版社、1961年、9～17頁。

43) Nguyễn Thị Ngân、「周遊列国的越南名儒李文馥及其華夷之辨」、『学際的アプローチから見るベトナム儒家思想の研究』（*Nghiên cứu tư tưởng nho gia Việt Nam từ hướng tiếp cận liên ngành*）、Thế Giới 出版社、2009年、180～188頁。

44) Trương Hữu Quỳnh、Phan Đại Doãn、『ベトナム歴史の著名人』第1冊（*Danh nhân lịch sử Việt Nam-Tập 1*）、Giáo dục 出版社、1987年、176～177頁。

エン、Tô Xuyên) と号した。河内省永順県湖口社の人で、1785年に生まれた。彼の祖先は明代にベトナムに移民した中国人であり、李文馥はその第六世である。彼の祖先は朝廷の官吏となったが、祖父の世代から儒者の業に従い、挙人（科挙試験の一つである郷試合格者）になった。しかし、李文馥の父は学問ではあまり成功しなかった。

李文馥には五人の兄弟がいた。幼い時期、家庭が貧しかったため、李文馥は占い師の仕事をしたこともあったが、己卯年（1819）に彼と二人の兄弟が三人とも郷試に合格し、挙人になった。彼は深淵な文才のある儒者である。

明命元年（1820）からは阮朝の官僚となり、明命（ミン・マン、Minh Mạng）・紹治（ティエウ・チ、Thiệu Trị）・嗣徳（トウ・ドゥック、Tự Đức）の三朝に仕えた。明命帝時代の初期には翰林編修に任用され、史館に勤務した。

明命6年（1825）に礼部僉事、協理広義鎮務を、明命7年（1826）に直隸広南営参協に任命された。

明命8年（1827）、戸部右侍郎になり、同年10月に『百司職制』の纂修として編纂の仕事に参加した。

明命9年（1828）4月、戸部署右参知になり、同年7月、嘉定場の主考として派遣され、10月、戸部署左参知になった。

明命10年（1829）冬10月、罪を犯し解職されたが、三、四か月後、罪を贖うために奮鵬船で小西洋（ベンガル）⁴⁵⁾に派遣された。

明命12年（1831）、平海船で新嘉波（シンガポール）に派遣され、同年、瑞龍大船で官僚である陳榮を福建に護送した。

明命13年（1832）、内務府司務となり、定洋船で呂宋（ルソン）に派遣された。

明命14年（1833）、平字七大船で台風にあった広東水師である梁国棟を広東に護送した。明命15年（1834）、兵部主事を授けられ、定洋・清洋船に乗り下州に公務として派遣され、同年4月、広東水師外委陳子龍を護送し帰国させた。

明命16年（1835）4月、逮捕された犯人を護送するため、広東に派遣された。

明命17年（1836）3月、李文馥は広東から帰国し、帝から一級の昇職という恩賞を受けた。同年6月、平洋船で澳門に再び派遣された。

明命18年（1837）2月に工部郎中を、同年7月に署工部右侍郎に任命された。

明命21年（1840）、署工部右参知、権理京畿水師事務に遷り、奮鵬船で新嘉波（シンガポール）に派遣された。

紹治元年（1841）、礼部右参知を授けられ、正使として清朝に明命帝の訃報を通知した。

紹治2年（1842）、礼部左参知になり、紹治3年（1843）、父安場の主考として派遣された。

紹治6年（1846）、紹治帝、李文馥を含む18人が「詞臣」（詩文にすぐれた文官）として称えられた。

紹治7年（1847）2月、広南などに侵入した西洋の船に交渉に行ったが十分に処理できなかったため、

45) Dương Quảng Hàm氏は「『西行詩紀』の序文には「小西洋」は「明歌」である、と述べている。Trần Văn Giáp氏によれば、「明歌」はBengale（ベンガル）であるという」と述べている。（注41前掲、Dương Quảng Hàm 注解、『李文馥、経歴一作品』（*Lý Văn Phúc Tiểu sử-Văn chương*）、10頁を参照）。

解任された。同年7月、『文規』を編纂するため人材が必要となり、李文馥は復職し、翰林院侍読に遷った。

嗣徳元年（1848）、郎中辦理礼部事務に遷り、翌年に光祿寺卿に抜擢されたが、在職中に亡くなった。礼部右侍郎を追封された。

さて、彼の作品の種類は詩集、筆記など豊かである。漢文の作品には『周原雜詠草』、『東行詩集』、『西湖勝跡』、『皇華雜詠』、『学吟存草』、『粵行詩草』、『粵行続吟』、『回京日記』、『鏡海続吟』、『李氏家譜』、『李文馥遺文』、『閩行雜詠草』、『閩行詩草』、『閩行詩話集』、『使程誌略草』、『使程括要編』、『克齋三之粵詩』、『三之粵雜草』、『西行見聞紀略』、『西行詩紀』、『西行見聞録』、『越行吟』、『越行続吟』、『東行詩説草』、『掇拾雜記』などがある。

また字喃による作品は『使程便覽曲』、『玉嬌梨新伝』、『婦箴便覧』、『千字文演音』、『舟回阻風嘆』、『不風流伝』、『二十四孝演歌』、『自述記』、『西廂伝』、『二度梅演歌』、『二氏偶談賦』、『西海行舟記』、『南関至燕京総歌』などである。

その他、『百官謝表』、『賦則新選』、『兵制表疏』、『屏書遺宝』、『名編輯録』、『名臣奏冊』、『陽岳松軒呉子文集』、『在京留草』、『臣民表録附裴家北使賀文詩集』、『中外群英会録』、『仙城侶話』にもその詩文が収載されている。

李文馥の事蹟や作品については、これまでさまざまに評価されている。『文学事典』には、「李文馥は漢文の作品も、字喃文の作品も優れていた。彼が多くの字喃詩の作品を作ったことは、当時の創作の潮流を明らかにし、民族の文学の種類を豊かにした。19世紀前半の文学、思想における代表的作者であったといえよう」⁴⁶⁾という。またグエン・テイ・ガン（Nguyễn Thị Ngân）氏は、「李文馥は忠孝の心を持ち、知恵と才能の豊か人であったことがわかる。彼の創作活動は民族の文化、文学に貢献した。彼は多くの種類の文学の遺産を残し、儒教の文学だけではなく、18、19世紀のベトナムの中世文学の傾向、潮流の代表者になった」⁴⁷⁾と述べている。さらに、『李文馥、19世紀の作者』には、「李文馥は忠孝の人であり、当時の儒者階級の代表者に相応わしい」とあり⁴⁸⁾、グエン・ドン・チー（Nguyễn Đông Chi）氏は、「李文馥の字喃の詩はすぐれた文章であり、朗読すると軽妙に聞こえ、感興を呼び起こす。彼は才能豊かな作者であるだけでなく、使命を果たした使君でもあった。彼が阮朝の使節として派遣された時、著わされた作品は19世紀前半の文学にも貢献した」⁴⁹⁾という。

このように、李文馥は政治・外交面で政務に従事する有能な忠臣であるとともに、字喃文学の発展にも大きく貢献した。また儒者として忠孝の思想を体現する人物でもあった。

46) 注38前掲、Đỗ Đức Hiều 他、『文学事典』新版（*Từ điển văn học bộ mới*）、928頁

47) Nguyễn Thị Ngân、「李文馥」(*Lý Văn Phục*)、『ハノイの著名人』(*Danh nhân Hà Nội*)、Hà Nội 出版社、2004年、540頁。

48) 注37前掲、Hoa Bằng、『李文馥、19世紀の作者』(*Lý Văn Phục, tác gia thế kỷ 19*)、28頁。

49) Nguyễn Đông Chi、「李文馥、阮朝の優れた外交闘争の筆鋒」(*Lý Văn Phục ngoài bút đấu tranh ngoại giao xuất sắc đời Nguyễn*)、『ゴー・ザー・ヴァン・ファイ、グエン・ザー・ティエウ、リー・ヴァン・フック、グエン・ミエン・タム、ゴー・ティー・ニヤム』(*Ngô Gia Văn Phái, Nguyễn Gia Thiều, Lý Văn Phục, Nguyễn Miên Thâm, Ngô Thì Nhậm*)、Văn Nghệ 出版社、Hà Chí Minh 市、1998年、95頁、104頁。

2. 陳秀穎の履歴

陳秀穎の経歴に関する資料は、筆者の調査によれば、『漢喃書目一作者目録』(*Thư mục Hán Nôm—mục lục tác giả*)⁵⁰⁾、『李文馥、19世紀の作者』(*Lý Văn Phức, tác gia thế kỷ 19*)⁵¹⁾、『ベトナム作者の略伝』(*Lược truyện các tác gia Việt Nam*)⁵²⁾、『西廂伝』(*Truyện Tây Sương*)⁵³⁾、『大南寔録』正編第二、三紀、『大南正編列伝』二集、『仙城侶話』の7点がある。このうち『大南寔録』、『大南正編列伝』、『仙城侶話』は漢文で書かれ、他の4点は現代ベトナム語による文献である。

現代ベトナム語による文献には陳秀穎の氏名、字、号、著作について重複する記述もかなりあるため、ここでは最も基本的な資料である『大南寔録』、『大南正編列伝』、『仙城侶話』の関連記述のみを引用する。

李文馥・陳秀穎・杜俊大により編著された『仙城侶話』の「仙城話語集序」には、

乙未夏、余奉命如粵、同派有陳君寔軒、杜君鑑湖者、余因得與之交焉、陳君乙酉科解元、與余有門誼。……陳公寔軒、金洞之延安人⁵⁴⁾。

とある。

また、『大南正編列伝』によると、

陳秀穎興安金洞人、明命六年、領鄉薦繇戸部行走累遷郎中十三年、授京兆尹坐事免、奉派乘大銅船送往粵東、江流波公幹、前後閱十餘年洋程、凡九度備經險艱開復至内務府郎中。紹治七年、以老母年屆八十得請歸養、自號金山觀濤老人、所著有家禮竝觀濤詩集、年六十卒⁵⁵⁾。

とある。さらに、『大南寔録』には、

明命十三年 「以戸部署郎中陳秀穎調署承天府丞……」⁵⁶⁾。

明命十四年 「授段文富爲工部左侍郎、……陳秀穎爲承天府丞署府尹」⁵⁷⁾、「授張登桂爲兵部尚書、……陳秀穎爲承天府尹」⁵⁸⁾。

50) 注1前掲、Ban Hán Nôm thư viện khoa học xã hội、『漢喃書目一作者目録』(*Thư mục Hán Nôm—mục lục tác giả*)、376頁。

51) 注37前掲、Hoa Bàng、『李文馥、19世紀の作者』(*Lý Văn Phức, tác gia thế kỷ 19*)、52～53頁。

52) 注5前掲、Trần Văn Giáp、『ベトナム作者の略伝』(*Lược truyện các tác gia Việt Nam*)、381頁。

53) Vũ Ngọc Phan 他、『西廂伝』、(*Truyện Tây Sương*)、Văn hóa 出版社、1961年、16頁。

54) 漢喃研究院蔵『仙城侶話』(A301)、第2葉表、第3葉表。

55) 注36前掲、『大南正編列伝』二集、卷二十九「大南寔録二十」、330頁。

56) 注18前掲、『大南寔録』正編第二紀卷八十五「大南寔録七」、376頁。

57) 阮朝国史館『大南寔録』正編第二紀卷九十六「大南寔録八」(慶応義塾大学言語文化研究所、1974年)、125頁。

58) 注57前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百九「大南寔録八」、322頁。

明命十五年 「府尹陳秀穎以短減犯産價値致民黷、控坐革畱」⁵⁹⁾、「承天府尹陳秀穎坐免」⁶⁰⁾。

明命十六年 「起復革員陳秀穎爲司務、穎前以府尹獲咎、得革派從青鸞船效力及還摘發派員陳公璋劣蹟故起用之」⁶¹⁾。

明命十八年 「起復陳名彪爲内務府、……陳秀穎爲内務府司務」⁶²⁾。

明命二十年 「分派官船如外洋公務瑞龍船以參知陶致富充正辦員外郎陳秀穎充副辦往江流波……」⁶³⁾。

明命二十一年 「遣副衛尉協領侍衛阮進雙充清洋船正辦員、外郎陳秀穎充副辦、送洋人哺移助等〔派員陶致富所雇護隋氣機船〕回下洲地方、因便採買貨項……」⁶⁴⁾。

紹治二年 「以二等侍衛武文智内務府員外郎阮文功充金鸞船副辦往江流波地方、……内務府員外郎陳秀穎充雲鵬船副辦、漕政副使阮公義充翔鶴船副辦均往新嘉波地方操演水程仍照内務府清單採辦」⁶⁵⁾。

紹治三年 「命戸部原左參知陶致富充奮鵬船正辦内務府員外郎陳秀穎充副辦往江流波……」⁶⁶⁾。

とある。

これに現代ベトナム語による資料4点の記述をあわせて陳秀穎の経歴と作品について整理すれば、以下ようになる。

陳秀穎は字を寔軒（トゥック・ヒエン、Thục Hiên）、号を金山觀濤老人（キム・ソン・クアン・ダオ・ラオ・ニャン、Kim Sơn Quan Đào lão nhân）という。興安省金洞県延安社の人である。明命6年（1825）乙酉科の解元となり、李文馥と同門の友人である。

上記7つの資料にはその生没年が記されていないが、『掇拾雜記』にある「詠二十四孝詩序」の直前に陳秀穎自身が「穎七八歳時、遠從學業、在外之日多、至二十有七、僥倖一解」⁶⁷⁾と記している。上述したように、彼は1825年に解元になったため、そこから、生年は1799年であると推測できる。60歳で、すなわち1858年に死去した。官職在任の間に何度か降格したが、しばらくすると、復職した。

明命13年（1832）から紹治3年（1843）まで、承天府丞署府尹、承天府尹、内務府司務をつとめ、江流波、新嘉波、広東、下州などに派遣され、前後十数年の日々を海外で過ごした。李文馥とは中国広東に3回同行している。その作品としては『家礼』（AB573）、『仙城侶話』（A301）、「觀濤詩集」が伝わっている。

59) 注21前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百三十二「大南寔録九」、276頁。

60) 注21前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百三十九「大南寔録九」、382頁。

61) 注23前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百五十一「大南寔録十」、134頁

62) 注26前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百八十二「大南寔録十一」、179頁

63) 注28前掲、『大南寔録』正編第二紀卷二百七「大南寔録十二」、164頁

64) 注28前掲、『大南寔録』正編第二紀卷二百十三「大南寔録十二」、266頁。〔 〕内は双行注。

65) 注29前掲、『大南寔録』正編第三紀卷二十六「大南寔録十三」、360頁。

66) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷三十五「大南寔録十四」、1頁。

67) 漢喃研究院蔵『掇拾雜記』（AB132）第50葉裏。

3. 杜俊大の履歴

杜俊大の経歴に関する資料は、筆者の調査によれば、『漢喃書目一作者目録』(*Thư mục Hán Nôm—mục lục tác giả*)⁶⁸、『李文馥、19世紀の作者』(*Lý Văn Phức, tác gia thế kỷ 19*)⁶⁹、『ベトナム作家たちの略伝』(*Lược truyện các tác gia Việt Nam*)⁷⁰、『ベトナム漢喃の作家の字、号』(*Tên tự tên hiệu các tác gia Hán Nôm Việt Nam*)⁷¹、『西廂伝』(*Truyện Tây Sương*)⁷²、『大南寔録』正編第二、三紀、『仙城侶話』など7点ほどある。このうち『大南寔録』、『仙城侶話』だけが漢文で書かれ、他の5点は現代ベトナム語の文献である。

現代ベトナム語による文献には杜俊大の氏名、字、号、著作について重複する記述もかなりあるため、ここでは最も基本的な資料である『仙城侶話』、『大南寔録』の関連記述のみを引用する。

李文馥・陳秀穎・杜俊大によって編著された『仙城侶話』の「仙城話語集序」には、

乙未夏、余奉命如粵、同派有陳君寔軒、杜君鑑湖者。余因得與之交焉。杜君先余二科、領鄉薦、則於余爲先達輩。……杜公鑑湖、文江之温舍人。皆吾三之粵、辰文章交也。交久而不衰道也⁷³。

とある。

また、『大南寔録』には、

明命十四年 「以工部署郎中杜俊大調署海陽按察」⁷⁴、「海陽按察杜俊大以私事擅用公篆、爲署督阮公著指參坐革職從部効力」⁷⁵。

明命十五年 「遺副衛尉范富廣、陳公璋、該隊范文伐等、帶同革員杜俊大、阮名砮、阮公僚分乘靈鳳青鸞奮鵬諸大船駛往江流波呂宋下洲公務」⁷⁶。

明命十六年 「遣工部員外郎李文馥、署戸部員外郎黎文豪等、管將兵船送獲犯于廣東起復革員阮公僚、杜俊大爲戸部正八品書吏隸隨公務」⁷⁷。

紹治元年 「皇考斂福錫民之惠乃各免、其爲兵效力、尊室謹、杜俊大開復司務……」⁷⁸。

紹治四年 「以工部員外郎杜俊大、太常寺員外郎阮忠義、均陞署吏部郎中……」⁷⁹。

68) 注1前掲、Ban Hán Nôm thư viện khoa học xã hội、『漢喃書目一作者目録』(*Thư mục Hán Nôm—mục lục tác giả*)、65～66頁。

69) 注37前掲、Hoa Bằng、『李文馥、19世紀の作者』(*Lý Văn Phức, tác gia thế kỷ 19*)、52～53頁。

70) 注5前掲、Trần Văn Giáp、『ベトナム作家たちの略伝』(*Lược truyện các tác gia Việt Nam*)、362頁。

71) 注40前掲、Trịnh Khắc Mạnh、『ベトナム漢喃の作家の字、号』(*Tên tự tên hiệu các tác gia Hán Nôm Việt Nam*)、134頁。

72) 注42前掲、Vũ Ngọc Phan 他、『西廂伝』(*Truyện Tây Sương*)、16頁。

73) 注54前掲、漢喃研究院蔵『仙城侶話』(A301)、第2葉表裏、第3葉表頁。

74) 注57前掲、『大南寔録』正編第二紀卷八十八「大南寔録八」、3頁。

75) 注57前掲、『大南寔録』正編第二紀卷九十六「大南寔録八」、125頁。

76) 注21前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百三十八「大南寔録九」、360頁。

77) 注23前掲、『大南寔録』正編第二紀卷一百五十「大南寔録十」、118頁。

78) 注29前掲、『大南寔録』正編第三紀卷三「大南寔録十三」、50頁。

79) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷四十二「大南寔録十四」、86頁。

紹治五年 「……以吏部郎中杜俊大補授鴻臚寺卿……」⁸⁰⁾。

紹治六年 「以鴻臚寺卿杜俊大陸署工部右侍郎」⁸¹⁾、「以署工部右侍郎杜俊大調署承天府尹。……俊大以承天妾貫上疏迴避。乃以署刑部左侍郎陳著調署承天府尹、杜俊大調署刑部左侍郎……」⁸²⁾、「署刑部右侍郎杜俊大免、俊大之子陰受人財、代單控狀、事發以禁約不嚴、降補員外郎銜發洋程效贖」⁸³⁾、「遺員外郎杜俊大乘彩鸞大船駛往新嘉波地方操演水程因便採買貨項」⁸⁴⁾。

紹治七年 「……以署戸部郎中潘伯彦補授倉場郎中員外郎杜俊大陸署禮部郎中……」⁸⁵⁾。

とある。

これに、現代ベトナム語による資料5点の記述をあわせて杜俊大のその経歴を総括すれば、以下のとおりである。

杜俊大は字を鑑湖（ザム・ホー、Giám Hồ）という。北寧省文江県温舎社の人である。生没年は不明である。嘉隆12年（1813）癸酉科の挙人になり、李文馥より二科先輩である。官職の生活の間に何回か降格を経験しているが、しばらくすると復職している。

明命14年（1833）から紹治7年（1847）まで、署海陽按察、吏部郎中、鴻臚寺卿、署工部右侍郎、署承天府尹、署刑部左侍郎、署禮部郎中を歴任し、江流波、親加波、広東、下州、呂宋に派遣された。彼は李文馥、陳秀穎と広東に3回同行した。李文馥、陳秀穎とともに『仙城侶話』（A301）を編著したほか、『掇拾雜記』に跋があり、『燕台嬰話演音』（AB285）に評論文が載っている。

4. 譚鏡湖の履歴

譚鏡湖についての資料はほとんどない。『孝順約語』に収める「二十四孝詠」には「附大清潭鏡湖詠」⁸⁶⁾とあり、『掇拾雜記』の所収の「詠二十四孝詩」には「和李陳杜詠孝詩二十四首、南海譚鏡湖秋江拜和」⁸⁷⁾とある。この情報にもとづき、筆者は『広東省南海県志』（清宣統2年）7冊、『三十三種清代伝記綜合引得（Index to Thirty-three Collections of Ch'ing Dynasty Biographies）』、『清代七百名人伝』の三資料を調べたが、譚鏡湖秋江氏という名は見えない。『李文馥、19世紀の作者』にも、「李文馥が中国人の文友と交渉した際、「孝」についての話題を話しつつ詩を詠じた。例えば、乙未（1835）の冬に広東に滞在した際、彼は中国人の文友である譚秋江とともに「二十四孝」について唱和した」⁸⁸⁾と簡単に述べるだけである。なお、杜俊大の「詠二十四孝詩跋」（『掇拾雜記』所収）のあとに、譚鏡湖はみずから、

80) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷四十八「大南寔録十四」、161頁。

81) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷五十四「大南寔録十四」、230頁。

82) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷五十四「大南寔録十四」、235、236頁。

83) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷五十九「大南寔録十四」、298頁。

84) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷六十二「大南寔録十四」、341頁。

85) 注32前掲、『大南寔録』正編第三紀卷六十八「大南寔録十四」、414頁。

86) 漢喃研究院蔵『孝順約語』第38葉表。

87) 注67前掲、『掇拾雜記』第63葉表。

88) 注37前掲、Hoa Bằng, 『李文馥、19世紀の作者』（*Lý Văn Phục, tác gia thế kỷ 19*）、49～50頁。

余少孤出就外傳（傳）一奉（券）青燈、半窗風雨、鬱鬱不得志者二十餘年、無何歸以奉母、母年老多病侍湯藥者凡八年。母歿又不克承先人之訓、以終其業。松楸相對、猿鶴爲隣、黍稷菽麥且不知、麻縷絲絮且不知。悠悠歲月于今四十年矣。……梁子（筆者注：梁釗（毅菴）である）曰、然子之志高、子之心亦若矣⁸⁹⁾。

と述べている。

ここから、譚鏡湖は字を秋江といい、清の南海の人で長く隠居生活をし、梁釗や李文馥と交遊があったことがわかる。

5. 梁釗の履歴

梁釗（毅菴）に関する資料もほとんどない。『掇拾雜記』に収める「詠二十四孝詩」には「乙未冬十一月既望、南海梁釗毅菴書于停雲山館」⁹⁰⁾とある。筆者は『広東省南海県志』（清宣統2年）7冊、『三十三種清代伝記綜合引得』、『清代七百名人伝』を調べたが、梁釗（毅菴）という名前は出てこない。しかし、『越南漢文燕行文献集成』の所収の李文馥「澳門誌行詩鈔序」に、

癸巳夏、余與同官洪大夫、奉國命護送、失風戰船來粵。八月既望、余獨以事之澳門。與南海梁君毅菴、同舟往返凡五日、得詩各如干首。毅菴蓋文雅士、而隱于市北、性恬和與物無忤。……是行余復與之俱。夫毅菴與余南北人也。余非因公來粵、固無由之澳門。即毅菴非余亦足跡之不所到、乃行。……顧念異地之相知、喜雅遊之有偶。何可付之散落、以遺大塊、文章一憾哉。於是總為抄取拾抄錄成編。聊以誌梁君與余之情於奇山秀水間、為梁君與余嘗居披閱焉耳矣。詩之所工拙、均非所計也。編成題顏曰「澳門誌行詩抄」并辯數行于端簡以送之云⁹¹⁾。

とある。

これによると、癸巳すなわち1833年の夏、李文馥が広東南海の人である梁毅菴とともに澳門（マカオ）に行った時、澳門のすばらしい景色について詩を作り、二人が唱和した詩を「澳門誌行詩鈔」という詩集にまとめたという。また梁毅菴は文学に優れた人であり、穏やかな性格の持ち主で、南海の市北に隠棲していたということもわかる。

二、「詠二十四孝詩」の形態

「詠二十四孝詩」（「二十四孝詩」）は漢喃研究院蔵『掇拾雜記』、『孝順約語』、『勸孝書』、『陽節演義』、『驩州風土話』の文献に収められている。このうち、現在知られる李文馥、陳秀穎、杜俊大、譚鏡湖、梁

89) 注67前掲、『掇拾雜記』（AB132）第62葉表裏。

90) 注67前掲、『掇拾雜記』（AB132）第66葉裏。

91) 中国復旦大学、越南漢喃研究院合編『越南漢文燕行文献集成』（復旦大学編出版社、2010年）第十三冊、82～84頁。

釗（毅菴）の五人の詠詩をすべて収載している文献は『掇拾雜記』の「詠二十四孝詩」であるため、本章ではこれによって考察することにする。

1. 作品の誕生背景および創作の動機

「詠二十四孝詩」に関して、『仙城侶話』にある「仙城話語集序」には、

乙未夏、余奉命如粵、同派有陳君寔軒、杜君鑑湖者。……辰因公暇相與論文、或發於詩、各存之集。就中有因事同詠者、有隨興別詠者。有次韻者、有不必次韻者。凡亦以聲韻代音話耳。余惧其久而謾也。所有二十四孝詠、另已合訂成編。……永湖克齊李文馥隣芝自序于仙城使驛⁹²⁾。

とある。

次に、「詠二十四孝詩序」（李文馥）の全文は次のとおりである。

余演二十四孝歌既成、陳君實軒、杜君鑑湖、不以爲無文誦不置、猝謂余曰、盍詠之、余惟二十四孝皆古聖賢絕行也、演之土音、俾易於成誦斯可矣、加一辭以贊之、不已贊乎、矧以余之筆墨、而何能摹寫其萬一、轉念仰聖謨景賢範、朱夫子蓋嘗有是言也、無已則章詠一截、仍繫于演音之後、各以致其景仰之誠焉爾詩之工拙且勿論何如、二君咸慙慙曰、是所願也、夫二君亦豈好爲矜長而銜艷者或情之所觸也、孝也、余不能違因書以爲序、後學 李文馥拜書⁹³⁾。

そして、「詠二十四孝詩跋」（杜俊大）には、

李隣芝翁演二十四孝歌成、余與陳君寔軒請詠之、翁始謂尋常筆墨、曷足以摹仿之、既而曰不妨、亦各致其景仰焉耳矣、遂乃各詠二十四首、以繫演後、夫孝之爲德固大、而學之者寔非高遠難行、貧富老幼、隨所遇之境、皆可得學、顧在力行之何如耳、余曰望余之子媳若孫、世世學之、其婦孺者於此歌、時時服膺焉、其讀詩者、尤於此詩、時時服膺焉、相與歌誦諷詠、有所興起、爲善思貽父母令名必果、爲不善思貽父母羞辱、必不果、縱未能遠追先哲、或赤□乎、至於詩之工拙、翁固曰非所論也、因書以爲跋。時 明命乙未復月文江學復堂杜俊大鑑湖書于仙城公館⁹⁴⁾。

とある。

また、「詠二十四孝詩跋」の直後にある譚鏡湖の文には、

歲之閏月、李君隣芝由越南奉使來粵、公餘之下、手編二十四孝詩成、同時和者、則有皆來之杜君鑑湖、陳君寔軒、其人也、出示梁子毅菴、屬余一閱、……夫二十四孝詩、非所以問世正、所以風世也、

92) 注54前掲、『仙城侶話』（A301）、第2葉表裏、第3葉表。

93) 注67前掲、『掇拾雜記』（AB132）、第51葉裏、第52葉表。

94) 注67前掲、『掇拾雜記』（AB132）、第61葉表裏。

爲國家正綱常者、此詩、爲閭里厚風俗者、此詩、將使仁人孝子霽然沐於光天化日之下者、此詩、甚盛事也、讀聖賢書、所學何事、……余不覺悄然而悲、矍然而起、和成若干首、以付毅菴、請質之隣芝諸君子、道光乙未復陽月既望、南海譚鏡湖秋江氏書于城西之聽潮樓⁹⁵⁾。

と記されている。

さらに、「和李陳杜詠詩二十四首」の譚鏡湖の詠詩の直後にある梁釗の文には、

乙未冬、越使李隣芝先生手編二十四孝演音一篇、且繫以詩、其同事杜君鑑湖、陳君實軒、僉謂、先生勸孝之心、殆深有益于風俗者。我朋輩亦不可不繫以詩、而推廣之、使知愚有所興感、以副先生之意、余感斯言、不敢以淺陋辭、爰成二十四首、以殿諸君之後、工拙非所計也、道光乙未冬十一月既望、南海梁釗毅菴書于停雲山館⁹⁶⁾。

とある。

これらを総括すれば、「詠二十四孝詩」の著作の動機がわかる。李文馥、陳秀穎、杜俊大はベトナムから中国広東に使臣として派遣されたとき、譚鏡湖、梁釗ら中国の友人とともに、李文馥の「二十四孝演歌」の続編の意味をこめて「詠二十四孝詩」を作った。彼らは「孝道」の実践の模範として代々の子孫に残し、子孫が風俗に善い影響を与え、国家の綱常が正しくなるよう貢献することを求めてこれをまとめたという。

2. 著作年代

「詠二十四孝詩」が作られた年代は、杜俊大の「詠二十四孝詩跋」には、「時 明命乙未復月」とあり、譚鏡湖の語にも「道光乙未復陽月既望」とあり、梁釗の語にも「道光乙未冬十一月既望」とある。ここから、「詠二十四孝詩」が明命16年乙未（1835）旧暦11月に書かれたことは明らかである（図1参照）。

3. 文献の形態

「詠二十四孝詩」は「詠二十四孝詩序」、「二十四孝詩二十四首」（李文馥作）、「二十四孝詩二十四首」（陳秀穎作）、「二十四孝詩二十四首」（杜俊大作）、「詠二十四孝詩跋」、「和李陳杜詠孝詩二十四首」（譚鏡湖作）、梁釗（毅菴）の詠詩で構成される。これは24人の孝子について詠じた七言絶句の漢詩であり、李文馥、陳秀穎、杜俊大、譚鏡湖、梁釗それぞれの24首の詠詩を載せ、さらに譚鏡湖による3首の詩を載せている。全部で123首、492句からなる。

95) 注67前掲、『掇拾雜記』（AB132）、第61葉裏、第62葉表裏。

96) 注67前掲、『掇拾雜記』（AB132）、第66葉表裏。

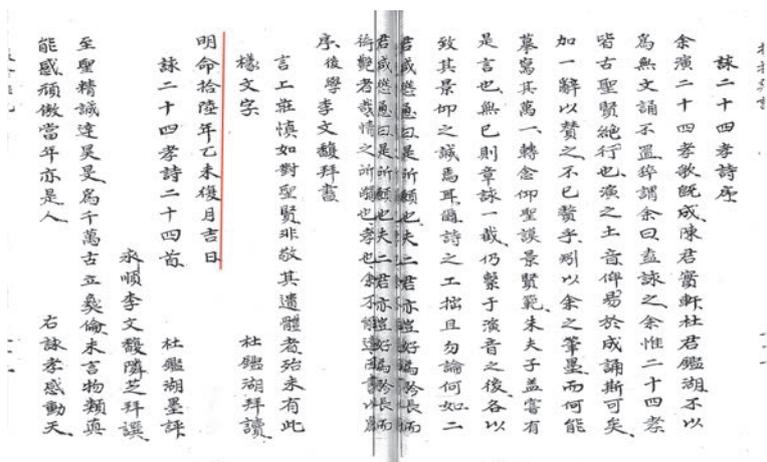


図1 「詠二十四孝詩」（『掇拾雜記』（AB132）所収、漢喃研究院蔵）第51葉裏～第52葉表



図2 「詠二十四孝詩」（『掇拾雜記』（AB132）所収、漢喃研究院蔵）第54葉裏～第55葉表

三. 「詠二十四孝詩」と漢詩文献

紙幅に限りがあるため、ここでは李文馥、陳秀穎、杜俊大、譚鏡湖、梁釗による詠詩（第一から第三まで）15首のみを考察することにする。他の文献、すなわち『孝順約語』、『勸孝書』、『陽節演義』、『驩州風土話』はいずれも李文馥、陳秀穎、杜俊大の「詠二十四孝詩」を取録しているので、それらとの文字の異同も記しておく。ただし、『驩州風土話』には譚鏡湖、梁釗の詠詩は収められず、『孝順約語』は譚鏡湖の詠詩を収めるが梁釗の詠詩を収めていない。『勸孝書』と『陽節演義』では、附録として譚鏡湖の詠詩を掲載しているが、第十三の陸績以降の詠詩が欠けており、また、梁釗（穀菴）の詠詩も収められていない。

校訂の結果を示す場合は、以下の略称を用いる。すなわち『掇』：『掇拾雜記』、『孝』：『孝順約語』、『勸』：『勸孝書』、『陽』：『陽節演義』、『驩』：『驩州風土話』である。

第一 孝感動天

① 李文馥の詠詩

至聖精誠達昊旻、爲千萬古立彝倫、未言物類⁹⁷⁾ 真能感、頑傲當年亦是人。

右詠孝感動天

〔日本語訳〕 この上なく知恵と徳に優れた舜の誠心は青天に通じ、はるか昔より人として守るべき道理となった。動物だけが感動したのではない。頑迷な父も、悪辣な弟も善い人間になった。

② 陳秀穎の詠詩

莫言象鳥可耕耘、一念孳孳⁹⁸⁾ 但服勤、惟幸親心常底豫、寧⁹⁹⁾ 知聖徳已升聞。

右詠孝感動天

〔日本語訳〕 象や鳥がふだん耕耘することができると考えてはならない。舜はひたすら勤めはげんだ。常に親の心を喜ばせようとだけ願っていた。そうした、舜の立派な徳がすでに天子の耳に入っていたことを誰が知ろう。

③ 杜俊大の詠詩

天遣重華¹⁰⁰⁾ 繼放勳¹⁰¹⁾、故教衡困¹⁰²⁾ 達宸聞、尋常親遜家家¹⁰³⁾ 有、媯¹⁰⁴⁾ 汭¹⁰⁵⁾ 何年靚躍雲。

右詠孝感動天

〔日本語訳〕 天は、重華（舜）を遣わして放勳（堯）を継がせた。その教えは門のしきいを通して天子の居所まで届いた。普通は親に譲ることはどの家でもあるが、媯水のほとり¹⁰⁶⁾ では、いつ、跳ね上がる雲が見られるのだらう。

④ 譚鏡湖の詠詩

歷山怨艾慕雙¹⁰⁷⁾ 親、鳥象同耕行絶倫、千¹⁰⁸⁾ 古綱常名教在、不知天地有頑人。

右和孝感動天

〔日本語訳〕 歴山では舜は悲しみに嘆息し、両親を慕う。鳥は象とともに耕し、ひとなみ外れて優

97) 『孝』、『勸』、『陽』、『驩』は「莫言象鳥」に作る。

98) 『勸』、『陽』、『驩』は「孳々」に作る。

99) 『驩』は「寧」に作る。

100) 重華は舜帝の名である。

101) 放勳は堯帝の名である。

102) 『孝』、『陽』は「閫」、『勸』は「聞」に作る。

103) 『勸』、『陽』、『驩』は「家々」に作る。

104) 『孝』、『勸』、『陽』は「媯」、『驩』は「爲」に作る。

105) 媯汭は堯が二女を舜にめあわせたとされる地。

106) 注105)に同じ。

107) 『勸』、『陽』は「双」に作る。

108) 『孝』、『勸』、『陽』は「萬」に作る。

れた行いをした。千古の聖賢の教えである三綱五常は、しかと存在する。世の中に頑迷な人などはいないのだ。

⑤ 梁釗の詠詩

貳室曾聞舊館甥、重瞳大孝久蜚聲、莫言頑傲應知感、禽獸當年亦代耕。

右詠孝感動天

〔日本語訳〕 離宮でわが甥（むこ、舜）¹⁰⁹⁾ の話を耳にするに、偉人の相を持った舜は大孝であると以前から有名だった。頑迷で傲る父・弟が感動したのは当然だと思っはならない。禽獸もまた舜に代って田を耕したのである。

第二 親嘗湯藥¹¹⁰⁾

① 李文馥の詠詩

九州榮養珍甘易、三載周旋¹¹¹⁾ 寢食¹¹²⁾ 難、喜動慈顏¹¹³⁾ 宜勿藥¹¹⁴⁾、此心抵得¹¹⁵⁾ 幾金丹。

右詠親嘗湯藥

〔日本語訳〕 天下において珍しく美味しいものを親に勧めるのは容易であるが、三年間、寢食の世話をするのは難しい。喜びが母の顔にあふれるには薬などはない方がいいのである。その心は何個もの仙薬に値する。

② 陳秀穎の詠詩

三載周旋¹¹⁶⁾ 不少衰、此心厚¹¹⁷⁾ 自代來時¹¹⁸⁾、漢家四百年天下、早在蒼龍一夢奇。

右詠親嘗湯藥

〔日本語訳〕 漢文帝は三年間の母の世話を、少しも怠らず、この優しい心は代国に来た時からあった。漢朝が四百年天下を治めることは、すでに青龍の夢に現れていた。

109) 妻の父を外舅といい、外舅に対してみづからを甥という。『孟子』万章篇上による。

110) 『勸』はこの「第二親嘗湯藥」部分の李文馥の詠詩、陳秀穎の詠詩、杜俊大の詠詩を欠く。

111) 『陽』・『驩』は「詳」に作る。

112) 『孝』は「睡寢」、『陽』は「眊寢」、『驩』は「跬寢」に作る。

113) 『孝』は「園」に作る。

114) 勿藥は『易経』无妄・九五に「无妄之疾、勿藥有喜」とあるのによる。

115) 『陽』・『孝』・『驩』は「是」に作る。

116) 『陽』・『驩』は「詳」に作る。

117) 『陽』・『孝』・『驩』は「原」に作る。

118) 原文は避諱していないが、『孝』は諱を避けるため「辰」に改めている。

③ 杜俊大の詠詩

帝王特孝異常、三載存存¹¹⁹⁾ 寢寐忘、一念願爲恭儉子、瑶圖四百萬年¹²⁰⁾ 香。

右詠親嘗湯藥

〔日本語訳〕 帝王の親孝行は普通とは異なるばかりか、三年寝ることも忘れ、恭儉の子となることをひとえに念願したので、美しい国土には四百万年もの香りが残された。

④ 譚鏡湖の詠詩

萬國¹²¹⁾ 昇平海宇寛、身先教孝敢言難¹²²⁾、寢門侍病三年藥、應是長春不老丹。

右和親嘗湯藥

〔日本語訳〕 万国は平和であり、海宇はゆったりと広い。自分がまず孝を教え、難しいとは言わない。寝室で看病して三年の間薬を与え続けたが、それは長生不老の仙丹のようである。

⑤ 梁釗の詠詩

寢門三載百焦憂、藥餌親嘗子道周、最是西京明詔好、躬將孝弟教神州。

右詠親嘗湯藥

〔日本語訳〕 寝室で三年間、さまざまに憂慮した。薬を自分で嘗め、子の道をやり遂げる。これが西京の詔の最も美しいものであり、自分が「孝悌」をもっと自国を教えたのだ。

第三 嚙指心痛¹²³⁾

① 李文馥の詠詩

母居深室子深山、一路¹²⁴⁾ 匆匆去復還¹²⁵⁾、指嚙¹²⁶⁾ 未應¹²⁷⁾ 心便動、是慈是孝獨¹²⁸⁾ 相關¹²⁹⁾。

右詠嚙指心痛

〔日本語訳〕 母は奥の部屋に暮らし、子は深山にいる。子は一路あわただしく帰ってきた。母が指を嚙めば、子は心を動かすはずだ。これは慈であり、また孝であって、初めて両者が通じ合ったのである。

119) 『孝』は「孜孜」、『陽』・『驩』は「孜々」に作る。

120) 『陽』は「江」に作る。

121) 『陽』・『驩』は「国」に作る。

122) 『陽』・『驩』は「难」に作る。

123) 『勸』はこの「第三嚙指心痛」部分の李文馥の詠詩、陳秀穎の詠詩、杜俊大の詠詩を欠く。

124) 『孝』・『陽』・『驩』は「樵採」に作る。

125) 『陽』・『驩』は「还」に作る。

126) 『孝』は「嚙指」、『陽』・『驩』は「嚙指」に作る。

127) 『孝』・『陽』・『驩』は「何能」に作る。

128) 『陽』・『驩』は「両」に作る。

129) 『孝』・『陽』は「関」、『驩』は「間」に作る。

② 陳秀穎の詠詩

祿¹³⁰⁾ 養羞從徑路尋、採薪日日到深林、指頭一嚙歸來早、感應先¹³¹⁾ 孚平昔心。

右詠嚙指心痛

〔日本語訳〕 母に孝養し尽くすために、小路を尋ね、毎日、深山に行って、薪を採った。母がひとたび指先を嚙むと、子が早く帰ってきたのは、常日頃から養ってくれた心に感應したのである。

③ 杜俊大の詠詩

積誠林藪¹³²⁾ 也非遙、感在無聲豈待招、啓聖廟中從祀冊¹³³⁾、顯揚到底屬山樵。

右詠嚙指心痛

〔日本語訳〕 誠の心を積んだ林は家から遠くないが、感應したのは声もないところであり、招くの待つまでもない。聖廟に申し上げ、冊を合わせてまつ。親を顕揚することは樵の属にまで達するのである。

④ 譚鏡湖の詠詩

一肩殘照¹³⁴⁾ 幾重山、伐木丁丁去復還¹³⁵⁾、心痛不知綠¹³⁶⁾ 緣底事、由來血脉總相關¹³⁷⁾。

右和嚙指心痛

〔日本語訳〕 片方の肩越しの見える残照は幾重にも重なる山々の上に映え、木をコンコンと伐りに行って帰ってくる心が痛んだのは何の理由によるのかわからないが、もともと血脉が通じあっているからである。

⑤ 梁釗の詠詩

心痛翻從指痛催、負薪入帶夕陽回、可知氣血相孚處、即是心傳一貫來。

右詠嚙指心痛

〔日本語訳〕 心が痛むのは指が痛むのに従ってのことだ。薪を背負って入り、夕陽をおびて帰った。気血が互いに通じあっている場合は、直ぐに心も真直ぐに伝わるのである。

130) 『驪』は「稱」に作る。

131) 『孝』・『陽』・『驪』は「元」に作る。

132) 『孝』は「寂」に作る。

133) 『孝』・『陽』は「祀典」、『驪』は「祖與」に作る。

134) 『陽』・『勸』・『孝』は「照」に作る。

135) 『陽』・『勸』は「还」に作る。

136) 七言絶句であるが、この句は8文字であり、1文字多い。『孝』本では「綠」の字がない。つまり「心痛不知緣底事」と訂正すべきであろう。

137) 『孝』・『陽』・『勸』は「関」に作る。

おわりに

この「詠二十四孝詩」を通して、中国人もベトナム人も「勸孝」の精神を強く保持し、両国の知識人が豊かな才能を発揮していることが知られる。今の段階で、この文献が逆に中国に伝わったのかどうか、伝わっていた場合中国でどのような反響を呼んだのかはわからない。しかし、本書は阮朝の大臣である李文馥、陳秀穎、杜俊大が中国の譚鏡湖、梁釗とともに著わしたものであったため、当時のベトナムの知識人に一定の影響を与え、ベトナムと中国の間の文化交渉に寄与することになったといえる。

「詠二十四孝詩」は漢詩文献であるため、字喃詩で翻案されている「二十四孝」関連文献に比べて学術性は高いが、逆に文献の民衆性、伝承性が低くなることは否定できない。漢文は当時の知識人層、科挙試験を受験する人々は講読できたが、「書二十四孝演歌後」に杜俊大が「土音、使婦孺皆得習而化之者」と述べているように、婦女や子供は漢文を読むことはできなかった。ここにいう「土音」とは、字喃により「六八体」および「双七六八体」の詩歌形式に翻案したものをいう。つまるところ、本書は「二十四孝演歌」ほど民衆に広く流布することはなかったが、当時のベトナムの官僚、知識人階層に影響を与えたものであって、ベトナムにおける中国文化受容のあり方を物語る貴重な資料といわなければならない。